

# 「男らしさ」にとらわれない ～男性学を通して学ぶ自由な生き方～

ふじさきやすひこ  
藤崎康彦さん (跡見学園女子大学文学部人文学科教授)

個性が尊重される時代になり、自分らしさが発揮できるようになった一方、「自分らしさ」や「自分らしい生き方」に迷う人もいます。「一人ひとりが個性を伸び伸びと発揮できる社会」は、男女共同参画社会の理念です。

今回、男性たちに向けて、「もう少し窮屈でない生き方」を実現するために何ができるか、跡見学園女子大学で「男性学」を教えている藤崎康彦先生にお話を伺いました。

## 男性学とは

男性学は女性学やフェミニズムの影響を受けてアメリカで生まれました。1960年代のフェミニズムが作り出した最大の成果の一つは「ジェンダー」という概念の創造です。ジェンダーは「社会・文化的な性別」を指し、生物学的な性別と区別されます。女性たちは「産む性(そして育てる性)」としての存在だけを本質と規定されて、様々な活動の制約を男性中心の社会から受けてきたと感じました。そして、「道具(むしろ武器)」として「ジェンダー」を用いて意識と社会の改革を訴えました。男性学は、アメリカではこのようなフェミニズムのインパクトを受け止めた男性たちの、一種の「自己省察」「自己覚醒」の運動として始まりました。つまり、男たちも、「男らしさ」を生物としての本質に根ざすものと勘違いしていたのですが、育てられた社会によって作られた「思い込み」だったのだとの「気づき」を得て、男性固有の問題や困難に取り組んだのです。もちろん、思い込みに捕らわれていた点で、女性と同質の困難があると気づけば、女性との連帯も自然なことから考える男性たちも多くなりました。

こういう動きは、日本には1980年代後半から1990年代に知られるようになりました。男性学に関わった初期の人たちは公民館などでの研究会のような「市民運動」的な感覚で、この分野を盛り立ててきたのです。今は、例えば「男らしさ」の困難、「男性の生きにくさ」などの「社会問題」の考察に関心が向いています。

## 男らしさとは

「男らしさ」とはどのようなものでしょうか。その一面をあげます。中年以上の人の多くは、男は「しかるべき教育を受け、それなりの会社に勤め、結婚し家族を持ち、持ち家で暮らす」道筋が当然の人生とと思っていたのではないのでしょうか。また、男に対応して、女も家庭に入って子育てに専念するのが自然な生き方、とも思っていたでしょう。男は会社、女は家庭という「性別役割分業」は、人生のごく当然の前提になっていた時代があったのです。



## 男性問題とは

しかし現在、このような「ライフ・コース」は、実現が非常に難しくなっています。「男性問題」はこの「ライフ・コース」そのものに由来するものと、この当然の生き方を期待することが困難になってきたことから来るものと、2つの起源を持っています。前者では、例えば「会社人間」一筋で来た男性が、定年退職後、家庭にも地域にも居場所がないなどです。しかし、後者に由来する例としては、若い人たちがこの従来の期待を実現できないことこそが深刻です。

従来は、(正社員の身分での)終身雇用、年功序列、様々な福利厚生制度などの恩恵を社員は受けていました。今はほとんどこの全てが、若い人たちが期待することが難しいものになりつつあります。非正規雇用の増大は正社員への道を難しくしますし、正社員もいつ「リストラ」されるか分かりません。若い人たちの間で「格差」が広がり、将来に希望を持ってないと感じる人が多くなっているといわれています。随分前から少子化が問題になっていますが、若い男性たちのかなりの部分が、十分な収入の得られる安定した職が得られないために結婚をあきらめている面もあるのです。(少子化や、晩婚化、生涯未婚率の上昇などの「社会問題」は複雑な要因が絡んでいて、いま触れたことだけが原因であるわけではありません。)



## 男の「縛り」から個性へ

変化の激しい現実と、従来からの価値とが、時間的なずれによって問題を起こしているのです。かつての高度経済成長のようなことは期待できません。若い人たちには、自分なりの生き方を追求してほしいと思います。若い男性たちの中に、友人たちと起業に挑むとか、あえて地方に移ってその土地に根ざした生活を築くとか、営利の追求を第一義とはしない、社会貢献のNPOを立ち上げるとか、意欲的な試みが見られます。日常生活でもシェアハウスで依存や干渉はせず助け合って暮らす人たちもいます。皆、社会的な広がりを持っています。そして何より、これらの人たちは従来の「男らしさ」の縛りから自由になって、その人らしさを表現しているように思います。

## 男女手を携えて

私は女子大で「男性学」を教えています。若い女性たちから多くのことを教えられています。彼女たちは考え方・生き方が柔軟です。男性たちに「頼りがい」を求めてはいますが、依存をしようとは思ってないように感じます。むしろ自分の生活を築こうとしている男性に「頼もしさ」を感じるのではないのでしょうか。「男らしさ」の縛りからはじめから自由であるだけに、自分らしさを追求する男性たちの良い理解者になってくれるはず。こういう人たちが増えてくれば、男女が棲み分けるのでもなく、支配・被支配の関係になるのでもなく、対等に助け合う共生社会が実現できると期待しています。

藤崎 康彦さん 跡見学園女子大学文学部人文学科教授

埼玉大学教養学部文化人類学コース卒業、明治大学大学院政治経済学研究科博士課程政治学専攻(社会学専修)単位取得満期退学。

専門は文化人類学。特に非言語コミュニケーション、東アジアのシャーマニズム、ジェンダー研究。近年は個々の社会における「人」の概念や分類、ジェンダー観の違いについて研究を行う。2009年より同大学で開講された「男性学」の授業を担当する。

主な研究に、「<言語とコミュニケーション>非言語コミュニケーション研究再考」「『平原インディアン』のベルダーシュの一考察—シャイアン族の「半男・半女」について—」「男が男を生む—イニシエーションとジェンダーの研究—」(共に学術論文)などがある